

# 吠え声・叫び声・沈黙

— 大江健三郎の世界 —

野口武彦



新潮社版

# 吠え声・叫び声・沈黙

——大江健三郎の世界——

野口武彦



新潮社版

吠え声・叫び声・沈黙

——大江健三郎の世界——

© Takehiko Noguchi, Printed in Japan 1971

印刷／1971. 4. 10 発行／1971. 4. 15 定価／600円

著者 のぐちたけひこ 野口武彦 発行者／佐藤亮一

発行所／新潮社 郵便番号 162 東京都新宿区矢来町71  
電話東京 (03)260-1111 振替東京808

印刷所／大日本印刷株式会社 製本所／神田加藤製本  
乱丁・落丁本はお取替え致します。

目次

「脱出」の神話から「救済」なき神学へ……………	5
補論一 現代小説と神学的主題……………	47
——「政治と文学」から「宗教と文学」へ——	
深い豎穴の世界……………	69
閉塞の時代の黄金伝説……………	119
補論二 「平和の時代」の終焉……………	162
バーナムの森か動くとき……………	177
吠え声・叫び声・沈黙……………	205
——大江文学における想像力の構造——	



吠え声・叫び声・沈黙

——大江健三郎の世界——



## 「脱出」の神話から「救済」なき神学へ

—

大江健三郎氏の作品を批評することはわたしにとって非常にいんどい仕事である。それもただたんに、大江氏の文体やイメージの分析をこころみるには莫大な思考力の支出を強いられるとか、この作家の豊富な、というよりも質感ゆたかな才能に圧倒されまいとするためには多大な心術を要するとかいうだけのことではない。大江氏はつい最近完結したエッセイ『壊れものとしての人間』のある箇所で、自分の小説を「誰か見知らぬ他人に自分の痼疾のような悪夢を送りとどける作業」と呼んでいるけれども、わたしが一愛読者としてのみならず批評を書く人間として「その痼疾のような悪夢」に立ち会い、その夢像の解説にとりかかろうとすると、それがいつの間にか内攻してわたし自身の内部に隠匿されている何かある不定形なもの、あいまいにしてきた部分、もつとありていにいえば、明確な言葉にすることをながらく怠っていた何ものか、に向つて屈折していつてしまうといった具合なのである。もとより、すべて批評を書く行為が、けつきよくは、あたかも繭から糸を紡ぎ出す作業と同様に、はじめは見えていなかった対象、煮られた蛹のように多少ともグロテスクな自己自身の本体、を明るみに出す結果になることをわたしはよく知って



いる。しかし、世の中には、自分とほぼ同一の世代に属するということも手伝って、その作品が、日頃はわたしの内面に閉じこもって黙秘権を行使している何ごとかコンプレクスめいたものを触発しないではないといった作家が存在するものだ。そのような負担の感覚から出発しなければならぬというところに、大江健三郎氏の文学を論ずることの特別なしんどさがあるのであって、それがわたしをこのほどとんど畏怖の感情なしには応接することのできない作家について書くことから遠ざけていた最大の理由なのである。

わたしはまず、大江氏が数年前に発表した一つの短い雑誌論文、わたし自身もそれからしたたかな衝撃を受け、現在もなおさまざまな意味でその影響の圏内にいる或る政治的事件の直後に執筆された文章がそのときわたしに考えさせたこと、感動と同時に一種のわだかまりの感情をもわたしにもたらした読後の印象、を記すことからこのエッセイを書きはじめようと思う。昭和四十二年の十月、佐藤首相の南ヴェトナム訪問の阻止を叫ぶ学生デモ隊が羽田空港付近で警官隊と激突し、十九歳の学生が死んだ事件の直後、大江氏は『死んだ学生への想像力』と題する一文を発表し、その一節に事件をめぐる首相談話にふれて次のようなことを書いている。

現にその感想をかれ（佐藤首相——注）が発している時間におけるジャカルタ滞在が、そもそもその原因をなしているところの、ひとりの若者の死について、首相は想像力を働かせることがない。想像力を働かせるとは、首相が、死んだ学生の内面にはいりこんで、あらためてこの事件をめぐる国内・国際状況の全体を展望しなおしてみることである。すくなくともそれだけの想像力の行使を首相に強いるだけの重みを、惨めに死んだひとりの学生の死体が持っているよ

うな体制をこそ、民主政治というのではないか？ 首相が、かれとは考え方のことなるかもしれぬ市民に対するそのような想像力をもち、それによって首相と市民との間に、自由なコミュニケーションがおこなえるような体制をこそ、民主政治というのではないか？

大江氏はのちにこの文章が「官憲がわの発表にもとづいた新聞報道」のみによつて書かれたという「恥ずかしいあやまち」をともなつたと告白しているが、しかもそれにもかかわらず、この発言は昭和四十二年十月の出来事の意味を正確にとらえた最良のものの一つであつたといふべきだろう。ところで、いまわたしが問題の発端にしたいと思ふのは、大江氏の文章中にある「民主政治」という言葉と「想像力」という言葉とである。おそらく、ここで氏がある種の驚嘆すべきナイーブさをもつて、あるいは——わたしはこれを決して皮肉にではなく、讚嘆の言葉として用いるのだが——『白痴』のあのマイシユキン公爵を思わせるほどと愚直さとさえ呼びたくなるほどの真率さをもつて「首相と市民との間に、自由なコミュニケーションがおこなえるような体制」について問いかけるとき、われわれの多くはまず第一に多少冷笑のまじつた反撥をもつてこれに酬いるという応答をしたくなつたのではないだろうか。現代日本の「民主政治」がこの問いかけに應ずる氣づかいはない、というのがわれわれの多くの常識的な判断であるだろう。また、羽田におもむいた学生たちは同じ文章中の「学生とは、もつとも敏感にこのコミュニケーションにみちた民主政治をもとめる若い市民である」というような言葉を必ずしも承認しないだろうし、まさにそのようなコミュニケーションが武装した機動隊によつて遮断されていたからこそ、羽田の出来事は起るべくして起つたのだといふべきだろう。事実、この事件の翌月に沖繩を訪れた大

江氏は、現地の高校生から「きみが羽田で死んだ学生をめぐって佐藤と民衆のあいだのコミュニケーションの断絶を嘆くのは、そもそも最初からまちがっているのだ」という「嘲笑」に接したと記しているのである。(『すべての日本人にとつての沖繩』)

これが大江氏の文章からわたしが漠然と感じとつたわだかまりの内容である。しかし、一方でそれと分ちがたくまじりあつた感動の理由を考へて、ようやくそれをたずねあてたとき、翻然わたしはみずからの軽率を悔いた。というのは、『死んだ学生への想像力』の中で大江氏の「政治家と民衆のコミュニケーションの夢」は、なんらそれに対する期待や幻想を語るものではなく、むしろ氏自身の深い絶望と恐怖の深みから発した悲鳴に近いもの、無益と知りつつあげられる救助を求める叫びのようなものである。そうした叫び声が発せられるのは、大江氏の思考の次元が「民主政治」を云為するところではなく、もつと根源的な人間の恐怖の深層にあるからであり、氏自身の「死んだ学生への想像力」がある日みずからを弾圧の中の死へと突出させていった一人の学生の魂の内部の暗がりに入りこみ、そこに湛えられていたはずの深甚な絶望と決意と恐怖とを確実に探りあてているからである。ここで大江氏が行使している想像力とは、たとえば日韓条約が国会で抜き打ち採決される現場を傍聴席から目撃していて、「本当に恐ろしいものを見たあとの嘔気」を感じることができる能力のことである。眼下の議場でいま行われている強行採決、ひとが通常茶番劇として失笑したり、多数党の暴挙などと非難したりしてけつきよくそれで安心してしまうことの背後に、何か「いまその本体が一瞬あきらかになつたと感じられるもの」、つまり「今日の時代そのものと呼ぶべきかもしれない怪物」(『恐ろしきもの走る』)がうずくまっているのがありありと視覚できる能力のことである。見方によつては、大江氏のこうした感受

性の構造は、暗闇の向うにいつも悪夢的に恐ろしい物の怪ものけ的なものの存在を感じてそれにおびえている幼児期への退行現象と考えられないことはない。しかし、本来作家の才能というものは、根本的にいって、このような退行現象の意識的な方法化のうちに成立しているものではないのか。少なくとも、こと大江健三郎氏という作家に関するかぎり、このいささかも鈍磨してない幼児的感受性は、最近の作品に見られるように「狂気」への予感さえこめて、大江氏の文学世界をかたちづくり、特色づける数々の地獄的光景をわれわれの前に提示する質量ある才能の髄質なのである。

二

人間の死はだれの死をとってみても厳肅な出来事であるけれども、そのどれもが一つの新しい季節を切りひらくといったものではない。しかし逆に、新しい政治的もしくは思想的季節の開始は、しばしば一人のあるいはいくたりかの人間の象徴的な死によって告知されるもののようにある。昭和四十二年十月の死は、それがもし「切実に緊迫した内的動機」にかられて自己の思想原理ないしはモラルを根本的フジカにつらぬこうとすれば、デモ参加者のだれにも平等に訪れうる死——昭和四十四年になってからの、さらに何人かの学生の死はその事実を確証している——であったということによって、われわれの魂を或る逃れがたい激しさでゆすぶる。その死は万人にとって自分と無関係な死ではありえないという意味で、いわばあらたなゴルゴタの事件だったのである。大江氏があの十月の死者の遺稿についての感想を、ただ「暗然としてうつむいてしまふ」(「山崎

君の日記を読んで」と記したとき、その暗澹たる想念はまた別の意味でわたし自身のものであるのだ。わたしはまだほんの数カ月前、ひとりの友人と交わした対話を思い出す。ある放送機関のすぐれた技術者でもあったこの友人は、昭和四十二年十月の出来事にやはり衝撃を受け、死んでいったかれと生きのびている自分とを対決させる論理をつきつめたことの結果として、自分の身の上に起りうる「一つの蓋然性としての死」をも予想しながら、反戦労働者の一員となって街頭の白兵戦に身を投じたのだった。その友人に、かつてはともかくも学生運動の指導者面をし、いまは大学教師でありもの書きにすぎないおまえはみずからの identity を保つために何をしているのか、また何をしようとしているのか、と問いつめられたとき、わたしが陥ったのはそれこそ「暗然として」うなだれるほかはない一時的な失語症の状態だった。そのとき決してわたしに言いがなかつたわけではない。しかし、その言いつの内容は相手に対する抗弁においてではなく、わたしが自分に課すべき仕事の成就（あるいは不成功）において意味を持つ性質のものだったから、わたしはむしろ苦しい沈黙の方を選んだのだった。

そのときわたしは友人への答弁の言葉を探すことよりも、あの十月のゴルゴタ的死がわたしの心に痛烈に呼びさました記憶に思いを馳せていた。いまから十年前、昭和三十五年六月に起っているもう一つの死、その頃の自分についてのある屈折した羞恥の感覚なしには思い返すことのできない一人の女子学生の死のお隠されていた意味、というよりも、六〇年安保闘争当時もずっとその後も、わたしがむしろ眼をふさごうとしていた意味を、羽田でのあの出来事の光が照らし出したとわたしは感じ、そしてその啓示はわたしに、自分があの当時も、その後批評を書き小説を書くことをこころみるようになってからも、何一つとして真実のことを口にしていないのでは

ないかという恐ろしい懷疑をもたらしていたのである。大江氏がある詩人の一行からこれを得て、『万延元年のフットボール』の重要なモチーフにしているものに、「ほんとうのこと」という言葉がある。真正の作家に固有する才能は、ただひとつそうした「ほんとうのこと」への偏執によってのみつちかわれる。しかもこの「ほんとうのこと」たるや、もともとアプリアオリに存在するものではなく、虚構という、その探求を通じてしか獲得されず、またその最上の表現を見出しえないものなのだ。ところで一方、政治の中の言葉は、それがたとえ真実を語っていても、決して大江氏が『万延元年のフットボール』で追求したような意味において「ほんとうのこと」であることとはないし、また、起りうる誤解と反論をじゅうぶんに予想した上でいえば、本来そうであってはならないのである。そのことはしかし、わたしが六〇年安保闘争の前後に、アジ演説においてあれ政治的文書においてであれ、口にもし書きもしたことがすべてデマゴグ的に虚偽であったことを意味しない。昭和三十五年六月の死者の反対党派に所属していたわたしが、その一年後の大江氏のように「むごたらしい死者のイメージにつきまとわれて怒りの情念に熱くなつて」語ることをせず、その死が啓示したところのものについて殊更に口をとぎしていたことはここでみとめておこう。その点に関してはわたしは自分の真実を語らなかつた。しかし、政治の言葉がよしんば真実を語っても、「ほんとうのこと」を語ることであつてはならないというのはただそれだけのことではない。たとえば大江氏は『壊れものとしての人間』のある章のなかで本来「壊れもの」であり、FRAGILEである人間の肉体」が暴力の場に連れ出される、あるいは出向くことへの恐怖心を根源にして到達される想像力についてこう主張している。

すくなくともかれは、暴力をくわえられる肉体としての意識をつきつめることで、それまでかれを縛りつけていた既成の言葉、想像力の限界から自由になった（または、はじきだされた）ところの赤裸の壊れものであり FRAGILE な存在なのだ。かれが新しい言葉、新しい想像力を選びとる自由もまた、かれのものではないか？

ここには大江氏に固有の、ほとんど体質的というべき思考の回路がある。「暴力をくわえられる肉体」それ自体は、いわば実存的な存在であつて、政治的でもなければ文学的でもないだろう。そして大江氏がここで予想しているような「新しい言葉、新しい想像力」に「かれの実存にかかわる有効性をあたえる決断」は、決して氏のいわゆる「政治的想像力」に帰属することも、そちらに向うこともないのである。「政治的想像力」は絶対に「言葉」によつて、壊れものであり FRAGILE である肉体をそなえた自分を隠蔽しよう（（圏点引用者））とすることはない。政治の言葉は、たとえ「言葉によつて」であろうとも、けつきよくは次の行為を呼びかけ、行為のうち一方が「隠蔽」しようとしたものを忘却させることを意図するだろう。たとえば「十一月決戦で死の覚悟をしえたものにおいて初めて××君虐殺をおのれ自身の問題として受けとめ、権力の非道に対する激しい怒りをもつことができる」と書くのが政治的文章の見本なのである。文学的な想像力は「暴力をくわえられる肉体としての意識はかぎりなくとぎすまされ、かれをかれ自身の人間的な根源にむけて押しあげ」て、その「極点」に「新しい言葉」をもつてからめとるべき「ほんとうのこと」、たとえば、焼き殺された黒人の写真が示すような「暴力についてなにごとか本質的なことをざとらしめるといった種類のもの」（『万延元年のフットボール』）のありかを探るだろう。こ

れに反して、純粹に政治的な言語にあつては、想像力は行為の彼方に「暴力をくわえられる」かつまた「暴力をくわえる肉体としての意識」を補償する目的の王国を現前させることにおいて行使される。それは決して「恐怖するもの、あるいは殲滅されるものとしての肉体」に集中されることはないのである。そんなわけで、わたしは自分の青春のある一定期間、「ほんとうのこと」の周辺に接近したり、公言したりすることをみずから禁止し、自分の属する党派に固有の目的の王国について語るのをごととしていた。六〇年安保闘争のさなかに簇生した組織的訓練のない——とわたしの信じた——政治的、文学、青年をわたしがひどく嫌い、かつ軽蔑したのもそのためだ。もつともいま思い出してみると、その軽蔑の感情の中には何パーセントかの皮肉な羨望がまじっていたことを告白しなくてはならないことも事実だけれども。

しかし、あの「ほんとうのこと」はともかくとして、いったい自分はいま真実を語っているのかという不安がまたしてもわたしをとらえる。もしかしたら、政治の中の言葉は本来「ほんとうのこと」を語るべきではないという認識自体がそもそも間違い、というよりもわたしの根本的誤謬を糊塗するためのソフィスティケーションであつて、わたしが当時もし「ほんとうのこと」をまったく自分の言葉で、自分の存在根源の問題として、すなわち野口武彦という名前を持った学生運動家としてでなく、学生運動家でも他の何でもありうる自分としてそれにかかわり、掘りおこしてゆく習慣を持っていたら、(あるいはむしろ自己にそれを許容していたら)当の政治的な行為選択も、そもそも政治的な行為を選ばなかったということも含めて、実際に起つたことよりはかなり違っていたのではないかという執拗な懷疑。しかも、何よりも怖ろしいのは、ひとたび亜政治家ないしは、え、政治家として文章を書き、その文体——ともし呼べるならば——を身



につけた人間は、まさにその致命的な選択の結果として、それを解禁した後でもあの「ほんとうのこと」へ向って言葉の鉢脈を掘り進む行為から生涯かけて疎隔されてしまっているのではないかと、一種強迫観念的な疑惑である。大江氏がいつも耳にし、かつそれを創作の発条に転化しているのは「暴力の外で暴力にかかわる想像力も行使することの原理的な無意味さ」を告発する声であるという。いまその口吻を借りていうならば、暴力の場からうまく身を退いたところで暴力にもかかわる想像力を発掘しようとするこの原理的な破廉恥さを告発する声をわたしはつねに聴いている、ということになるだろうか。何であれ自分の書くものがついにこうした告発と追及とから逃れられないことをわたしはこの数年の経験から知っているし、また論理的にもそれを見とめる。わたしの「ほんとうのこと」の所在はまだ定かではないが、少なくともいまのわたしに抱え込んだ問題の重さがあることだけはたしかである。とはいえ、水泳の飛び込み選手が水面への降下に自分の体重を利用するように、問題の重みを想像力のエネルギーに転化させ、「ほんとうのこと」を語るためにもそれなりの方法が、さらにいえば技術の獲得が必要である。わたしはここ当分の間、自分のしていることが、「ほんとうのこと」の周囲を永遠に循環しながら、いささかもそれに接近することのない遊星の運動めいた結末に終るのではないかと、いささか疑念に耐えながら、自己自身の内部への坑道を開鑿するすべを学んでゆかなくてはならないだろう。

しかしそれにしても、『作家は絶対的に反政治的たりうるか?』というエッセイの中で、「作家を持続させるもの」について次のように断言したとき、大江氏はいかにみごとに昭和三十年代の政治的青春の二律背反を、そして戦前のプロレタリア文学運動から第一次戦後派文学にいたるまでの周知の「政治と文学」の二元論を、あたかもゴルディアスの結び目のように断ち切って見せ